



”だってコレは同人のお話であって、原作とは何の関係もないんですもの”

このCG集は
蕩に趣味で
描かせていただいた
CG集です。
はっぴ〜た〜ん
□堂□

戦場を舞台にした5人のヒロインたち

彼女らに執拗に性交遊を迫られる阿良々木暦

その全てはある一人の人間によって計画されたシナリオだった…!?

阿良々木暦と5人のヒロインたちが送る、性旬のCG集

これぞ現代の

蕩物ガタリ語上

こよみハーレム

エロス!

エロス!

エロス!

お前まで、言ってしまうか同人と。



蕩物語り 上

こよみハーレム



貝木泥舟との対決後、伏線を回収するかのようになり、僕は戦場ヶ原の家「民倉壮」の201号室へと招かれた。

「実は今日ね、親、帰ってこないんだ」

「なぜラブコメ風に言う！」

つか待て、そのネタは確か猫物語（白）で羽川に使うネタだろ！

そもそも時系列的に今の僕が知ってるのはおかしいし、

その頃僕はその場にいなかったっ！」

スーパーウルトラミクス！

一応今の僕は貝木と対決後ってコトになっているのだ。

「大丈夫よ阿良々木くん。だってコレは同人のお話であつて、

原作とは何の関係もないんですもの、時系列なんかも目茶苦茶よ」

「同人ってお前……前から思っていたけどソツチ関係のコト結構詳しいよな、

萌とかツンデレとか、今度は同人か」

「脳みそがミジンコ並の阿良々木くんは知らないかもしれないけれど、
今、現代はそう「オタク文化ブーム」なのよ。

だから、そういうような言葉はむしろ一般的と言えるわ。」

「そうなのか。」

人が吸血鬼になつてる間に世間はがらりと変わってしまったんだなあ…

「それはともかく阿良々木くん？」

「何だよ」

「わたしはお腹がすいていますよ？」

「いや、だからそれも八九寺がまよいマイマイ第二話の

締めめに僕に言う台詞だ！

いい加減僕たちが小説かなんかの登場人物だと思われてしまうから、
そういうメタは止すんだ！」

「失礼、噛みました!」

「いいや、噛んでない!」

そんな突っ込みを気にもとめず、仕切り直す感じで戦場ヶ原は言う。

「そう、では話を戻します。」

だから私がせつかく張った伏線を回収出来る機会を設けて、

今布団に横たわっておっぱいとおぱんっ様全開の開脚を披露しながらも、

ほんの照れ隠しのつもりで言ったつもりのボケに対して、

わざわざ突っ込んでいる暇があるのなら

もつと別に“突っ込むモノ”があるんじゃないかしらあ、

と言いたいのだけど。あまり女に恥じをかかせるものではないわ。」

「言い方が下品過ぎる!」



「うぐい、言わない、 団長命令よ。」

言うことが聞けないのなら死刑で私刑よ」

「いつからお前は、 北高の園芸部を乗っ取って出来た

謎の部の団長様になったんだ!？」

憂鬱なのか!？」

「S…戦場ヶ原のおっぱいとおぼんつ様を見て股間を

O…おおいに盛り上げて

S…性交遊に興じる

男 (だん)。SOS男。 あなたのコトよ阿良々木くん」

「だから下品だって!」

男 (だん) って…

「…なんかさ、 もっと言い方とか、 こう雰囲気とかあるだろ!」

「わからないの? 平静を装っているけれど、 本当はかなり緊張しているわ。」

それに……」

少し伏し目がちになりながら、呟くように戰場ヶ原は言う。

「少し……怖いわ。」

昔の事……4人の詐欺師の内の一に乱暴されそうになったこと……。それを思えば、怖いのも無理もない。

戰場ヶ原の鋼の様な貞操観念はそれらのコトが原因なのだ。

しかし、彼女は貝木と対決を果たし、過去と決別するため

勇気を振り絞って僕に全てを委ねようとしてくれている。

ならば、僕はその気持ちを受け止め

優しく包みこんでやらなければならぬ。

なぜなら僕、阿良々木暦は、

彼女……戰場ヶ原ひたぎを愛しているのだから。

「わかった。もう何も言わないよ。

僕に全てを委ねてくれ！必ず、怖い思いはさせないから」

「……………はい。」



「これが戦場ヶ原のおっぱい…
すごくやわらかい。」

「ん、あつ」

サッフ
サッフ
サッフ
サッフ

阿良々木くんの…手…すごく優しい。

いつも…いつだってみんなに優しいこの手、

今は私だけの手。



「んっ、ん…」
「んふっ、んんっ」

他人に胸を触られるのが

こんななに気持ちいいと感ずるなんて…。
いいえ、多分阿良々木くんだから…。

はま

はま

ピュッ

サッ
サッ

サッ
サッ

じわ…



「乳首勃起ってきたね。」

「そんな事、んっ、いちいち言わな

んっ、で頂戴。」

恥ずかしい！

身体が熱い、乳首溶けちゃいそう。

はみ

はみ

さっ

さっ

さっ



「戦場ヶ原、すごく可愛い。」

「ココももうトロトロだね」

ぽ〜

ゴロ

ゴロ

タン

「あまりジロジロ見ないでくれるかしら？
童貞丸出しよ。」



「良いじゃないか、僕はお前が初めてで
戦場ヶ原は僕が初めてなんだし。」

ぽ〜

ゴッ

ゴッ

タン

「む。」

初めてのくせに随分余裕じゃない。

阿良々木くんのくせに生意気よ。



ふんぐ...

「じゃあ、舐めるよ。」

ドキドキ

くはぁ

やだ、阿良々木くんの息が当たってる...



「んっ、んん、んうん
ん、ん、ん。」

舐めてる音…

すくすくいやらい…

ちゅ
ちゅ

ん
ん



「あつ、あん、ああつ
や、ソコ…ダメっ、痺れちやうー！」

ゴックン

すずすず
へっへっ
へっへっ

やだ、
変な声勝手に出ちやうー！



「気持ち良い？」



「そ、そな、んっ、事、聞かないですよ」

「やだ…イキそう…」

「阿良々木くんの手でイっちゃうっ！」

「やっ、激しいっ！」

「ああああああっ!!!」

ゴックン

ゴックン

ゴックン

ゴックン

クチャクチャ

クチャクチャ

もうダメっ！イクっ、イクっ、
イっちやうっ！





「んんんんん」

ゴクゴク

ゴクゴク

イクッ!

ゴ
ミ
ハ
マ
マ

ゴク

ゴク

ゴク

ゴク



「……………」

「戦場ヶ原、僕もう我慢できないよっ！
挿入れるよ？」

ドク
ク

ピト...

「え？ちよっと待つ...」
今、いっぱいなのに、挿入れちゃうの？





「んんんんん」

ドク

ズグッ



「すげえ、戦場ヶ原の膣内、超気持ち良いよ！
てか、血い出てるけど痛くない？」

はあ

はあ

パンチパンチ

パンチパンチ

パンチパンチ

ジュガ
ジュガ

「だ、大丈夫よ、続けて頂戴。
いったばかりで敏感になってるけど、
痛みより快感の方が強いみたい…」



「やべえ、気持ち良すぎて、腰止まんないよー！」

はあ はあ

「あっ、あっ、あん、ああん

はあん、んんっ、くうん」

すごい...もうわけわからぬ...

何も考えられない...



パンチー

パンチー

パンチー

パンチー

ジュガ
ジュガ

「ダメだっ、僕もうイクよ！
戦場ヶ原！膣内ですぞぞ！」

「あっ、あっ、あっ、あっ、ああん、ああっあっ

あっ、あっ！」

もう何でもいいっ！

イク、イク、イクううううっ！

はあ

はあ

はあ

ドク

ドク

パ
ン
パ
ン
パ
ン
パ
ン
パ
ン

パ
ン
パ
ン
パ
ン
パ
ン

パ
ン
パ
ン
パ
ン
パ
ン

ジュガ
ジュガ

ジュガ
ジュガ

「ヨネシー」

「ムキオシカニクニクニ」

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴク

ゴク

ゴク

ゴク

フニフニ

ゴク

ゴク

ゴク



「ああ…はあ、はあ、すげえ気持ち良かった、
戦場ヶ原は？」

つか、避妊とか大丈夫だったのか？」

「あ…あ…ああ…あ…」

「ダメだ、全然聞こえてない…。」

でも、すごく気持ちよさそうな顔してるなあ、

初めてにしては上出来かな？」

はあ

はあ

はあ

はあ

ドク

ピクピク

ドク…

ドク

後日談というか、今回のオチ。

その後、二回戦目に突入したのだけど、当然僕に主導権はなく、初めてで二回もイカされたコトを根に持ってたか

僕の分身は散々文房具で弄ばれた。

その内容は割愛するが。

まったく、半吸血鬼じゃなかったら、えらいコトになっているところだ。





いつもの様に偶然道端で八九寺と出会った。
しかし八九寺の様子はいつもとは違っていた。

唐突に僕の家に行きたいと言いだしたのだ。

どういうつもりだ？

まあ、僕としては断る理由もなく、ましてや八九寺の方から家に行きたいなんて言うのはとんでもなく珍しかったので、

僕は快くOKして家に連れて行ってやるのだった。

僕の部屋に入るなり、八九寺はベッドに横たわり、

ぱんつ全開の大腿を開き、脚でアルファベットのMを作る。

M字開脚である。

「あの、ロリ好きさん」

「人をただの小さい女の子を性の対象にするような

変態みたいな言い方で呼ぶんじゃない！僕の名前は阿良々木だ！」

「失礼、噛みました。」

「違う、わざとだ。」

「かみまみた!」

「わざとじゃないっ?」

「割れ目見た?」

「いや、さつきからそんな体勢でいたら

自ずとそこに目が行ってしまっただけだな、八九寺よ。

「一体どういうつもりなんだ?」

「いえ、阿良々木さんのコトだから、鬼物語のラストシーンでの

キスだけでは物足りないんじゃないかなあと、

こうしておまた全開の「」パンツでお誘いしているのですよ」

「ちよっと待て!今は一体いつなんだ!?

少なくともそのシーンの後じゃないだろ!!」



「大丈夫ですよ阿良々木さん、これは同人というものですから、作者が好き勝手補完したものです。」

だから時系列も関係ありませんし、浮気にもなりません。」

「なんだ同人って！」

僕たちが物語かなんかの登場人物みたいな言い方はやめろ！

そういう存在自体が危うくなるメタは止すんだ！」

と、僕のツツコミに対して

何かじれったいような表情を浮かべながら八九寺は言う。

「もう、察しが悪い人ですね！」

だから、その…私はずね、

阿良々木さんのコトが……き、なんですすよ！

あのラストシーンを思えば察しがつくじゃないですかあ!!」

「だからその、ごにょごよ……しないと……成仏出来ないん、ですよ。」

「ん？八九寺よく聞き取れなかったぞ？もう一回言ってくれ。」

「い、言わせるなよ、恥ずかしい！」

なんだコイツ、すげえ可愛いぞ！

八九寺はほつぺたを真つ赤に染め、いつもならごこからまた

話を膨らませるだけのパスも叩き落とし、

真剣な赴きで言うのだった。

(台詞はネタっぽいが)

本当にいつもと違う。

逆境に弱いメンタルの小さな少女が精一杯の勇気で

僕に告白してくれたのだ。

ならば僕もそれに応えてやらなければならぬ。

「……八九寺。わかった。全部僕にまかせろ。」

「……はい。ロリ好きさん。」

優しくして下さいね。」

「ん〜八九寺、可愛いぞお、へろへろ」

「あ、阿良々木さん

いきなり。へろへろですかあ？」

あ、んっ、んっ…」

そんなトコ舐められたら

ゾクゾクしちゃいますう。」

さっさっ

ぽろぽろ

さっさっ



「やべえ、八九寺の太もも、スベスベのプリプリで
すげえ興奮する。」

「ん、うん、んんっ、ん…」

そんな口に出して言われると恥ずかしいじゃないですかっ！
なんでこんな変態のコトを…。

さっさっ

ピコピコ

じわ…

さっさっ



「ん、ん、んふう、んっ」

でも、やっぱり、そんな阿良々木さんを

いつだって阿良々木さんのままだから好きになっちゃってしまっただけですね。

さっさっ

ぽっぽっ

さっさっ



「おおっ、お前つて発育はいいくせに、

ヨコはまだツルツルなんだなあ。」

ぽ〜

ゴッ
ゴッ

タン

「わ、私は愛されキャラなので、
需要にお答えしているだけですよ。」



「いや、違う！」

お前は、僕のためにツルツルでいてくれたんだっ！」

ぽ〜

ゴッ

ゴッ

タン

「な、何訳のわからないコトを言ってる…あつ！」



「広げちゃダメですうっ」

「うお…コレが八九寺の…クリ剥けてないんだな、
ビラビラもこんな小さくて…」

くはま

阿良々木さんに見られてるっ！

すごく近いです、息が当たってますう！



「あつ、ん、はあ、んん」

「そんな、トコロ、舐め、ちやあぁ」

ビク

ジュル
ジュル

ゴロ
ゴロ

ヤダ、阿良々木さんに、
私の大事なトコロ
舐められちゃってますぅっ！



「あ、阿良々木さん、私、何かふわふわして、来ました。アソコもジンジンして、何が上ってくる、んっ、感じ、です。」

「八九寺、お前いきそうなんだな？」

「行く？、あつ、ですか？、んんっ」



「違う、「イク」だ。耳年増なお前が知らないわけないだろ。」

「いえ、本当に、あつ、知りま、んつ、せんよ、お。」



「よし、じゃあ今イかせてやるから、イク時ちゃんと

“イク” って言うんだぞ?」

「ん~~~~っ!!」

すごいです、阿良々木さんの手で
膣内かき回されちゃってますぅっ!

だんだん、
何かが、
上って…
上って…



「あああつ！今、ソコ触っちゃあああつ！！」

「八九寺！イクのか!?イクんだろ!?!」

「あああああああつ!!」

「イキますうつ!!いつちやいますうつうつうつ!!」





「いきま、

んんんんんん

んんんんんん」

ゴクゴク

ゴミヤマ

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

「はあ、はあ、

しゅ、しゅごかった、
れふ……。」

ぽ〜

はあ

はあ

ゴク

ジュッ
ジュッ

タン

ジュッ
ジュッ

ジュッ

身体に力が入りません。
もう、
動けません。



「あひやひやひ、ひやん？（阿良々木さん？）」

「八九寺、はあ、はあ、

可愛いよお、もう、我慢出来ないよ。」

ビク

はあ

はあ

ゴ

ゴ

ピト...

ビク

え？今、全神経がアソコに集中しちゃってる感じなのに
そんなモノ挿入れられてしまったら...



「待つ……」

ビウ

んん
——
——
——
——
!!!

ズグッ



「あつ、あつ、あまああつ」

「八九寺っ！ヤバイ、締まるっ」

「パチャン」

「パチャン」

「ビュッ」

「ビュッ」

「ビュッ」

「ビュッ」

「ビュッ」

「ビュッ」

さつきからビクビクが止まりませんっ
いきっぱなしになっちゃってますっ



「くうつ、八九寺いっ

腔内、ビクビク脈打って

もうダメだ、イクぞっ！」

「あああ、ああああつ

おらひも（私も）」

また、大きいの来ちゃいますっ！」



パンパン
ビク

パンパン
パンパン

ゴビゴビ
プニャプニャ

パンパン
パンパン

ビク

ビク

ビク

ビク

「!!!!」

「!!!!」
んんんん

ゴクン

ゴクン
ゴクン

ブルブル

ゴクン
ゴクン

ゴクン

ゴクン

ゴクン

ゴクン

ゴクン

ゴクン

「あひやひやひひゃん、ひもひよはつたれふ。ほれへ、わらひも…
(阿良々木さん、気持ち良かったです。これで私も…)」

「八九寺…」

「違うよ、僕の名前は、阿良々木だ…」

「ひふれえ、はみまみは…」

はあ

はあ

はあ

はあ

ビクビク

ビク

ビク

ビク

ドク...



後日談というか、今回のオチ。

あの後、八九寺はあのまま、幸せそうな顔で逝った。

たく、最期のは噛めてないっての。

最期まで、いつもと違う八九寺だった。



久しぶりに神原に家に呼び出された。

用件は聞かなかったが、

またいつもの部屋の片付けだろうとそのつもりで

来たのだが…しかしそうではなかった。

「神原、見たところ部屋は散らかっていないみたいだが、僕はなんで呼び出されたんだ？」

そして、どうしてお前は尻をこっちに向けてんだ！」

「うむ、見ての通り片付けは先日大急ぎで済ませた。

だから今日は別の用件でご足労頂いたのだ。」

「ふむ。で、お前のその体勢と何か関係があるのか？」

「さすがは阿良々木先輩だ。」

私の考え等は全てお見通しなのだな。」

いや、普通そうとしか思わないだろ。

「実は先日、戦場ヶ原先輩から

阿良々木先輩と性交遊を果たしたと伺ったのだ。」

「プライベートもあつたもんじゃないっ!!」

「それで、

私は是非戦場ヶ原先輩と竿姉妹になりたいと思ひ、

こうして阿良々木先輩に頭を下げて、
もとい、尻を上げてお願いしようと、
そういうコトなのだ。」

ヴァルハラコンビは一方は鋼でもう一方は
こんにやくのような貞操観念の持ち主であった。

「あのなあ、神原、そういうコトは

そんな軽い気持ちでやっちゃいけないと思うんだよ。

第一、戦場ヶ原が黙ってないと思うぜ？

お前も僕も殺されちゃうぜ？」

「ああ、そのコトなら大丈夫だ。

戦場ヶ原先輩にはちゃんと許可をもらっている。」

「軽いなあ!!」

「それから、こころも付け足していた。」

「同人なんだからそれくらい多めに見るわ。

それもエロ同人ともなれば、

そうでもしないとお話にならないでしょ。」

「また同人か!」

同人なのか!?僕たちは同人作品なのか!?

「ああもうわかったよ！」

突っ込みを入れるのも馬鹿馬鹿しい。

お望み通り、僕のマグナムを突っ込んでやる！

半吸血鬼の僕は一味違うぞ！」

「ふふ、その気になったようだな、阿良々木先輩。

この神原駿河、その攻め、

全て受けきってみせよう！」



「前戯は無しで頼む！」

「ちやいや、ソレじゃ僕の気持ちが高まらないんだよ！」

「ふむ、なら仕方ないか。」

「遠慮は要らない。」

「どんな風でも、好きに触っていいのだぞ。」





さっ さっ

さっ さっ

「そーいや、スパッツの下はどうなってるか
前に話したよな。」

「この感触からすると、お前やっぱり…。」

「ははっ！ペレてしまったな！」

「これで私が如何に変態かわかっていただけただけかな？」



「私が『口だけの』女ではないコトも
わかっていただけたかな？」

さっ さっ

さっ さっ

「お前、まだソレ根に持ってたのか…。
ああ、このムチムチの尻に免じて、
信じてやるよ。」

「わかれれば、あつ、んっ、良い、のだ、はあん。」



「うが、すごい濡れ方だな、スパッツ越しなのにクチュクチュ音がしてるぜ。」

ピョッ

「あつ、その手が、ああん、戦場ヶ原先輩の身体を這ったと思、うだけで、私は、戦場ヶ原先輩を感じられ、るのだ、んんっ。」





「大した妄想力だな、ホント。
つか、スパッツ脱がせにくいんだけど、どうする？」

「んっ、ああん、あっ、あっ
破ってくれて構わないぞ、代えはいくらでもある。」



「あ、ああ、わかった。行くぞ！」

はよ

はよ

「阿良々木先輩、もう我慢出来ない！
早くソレを思い切り突っ込んでくれっ！」

ん

なんて太くてたくましいんだ...
戦場ヶ先輩はこんなモノで初めてを...ならば私も!



「よっ、じゃあめ...」

んん

はぁ

はぁ

==###!



「ゴッ」

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ
ゴッ
ゴッ
ゴッ

「さ、さすが阿良々木先輩だ…」

初めてなのに挿入ただけで、**イク**ってしまったぞ。」



「うわ、神原の膣内すごい締め付けだっ

僕ももう我慢できないよ、動くぞっ!」

はな

はな

はな

今いったばかりなのに、動かしたら、

私はどうなってしまうのだろうか。



「あああああああつ!!!」

さっきからいきっぱなしだつ!!!

イクの止まらないつ!!!

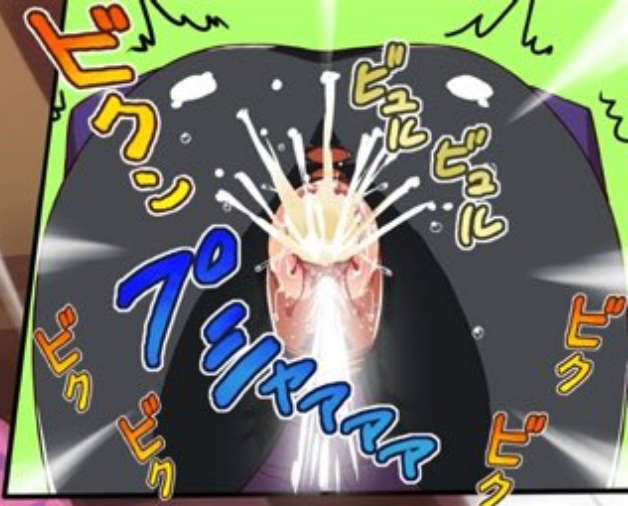
「うああ、神原、ヤバイヤバイつ!!!
膣内ビクビク脈打ってるの腰止まらねえつ!!!」



「んほおおおおおおおおおおおっ!!!」



「田舎!!!」



ゴッ..

ゴッ..

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ



「神原、ごめんな、

途中から夢中になっちゃって……。」



「ああ、わらひいは、ほのふらいは、ひょうほひい。
(ああ、私にはこのくらいが調度良い。)」

後日談というか、今回のオチ。

その後、神原が落ち着いた頃、
驚くべき事実を打ち明けやがった。

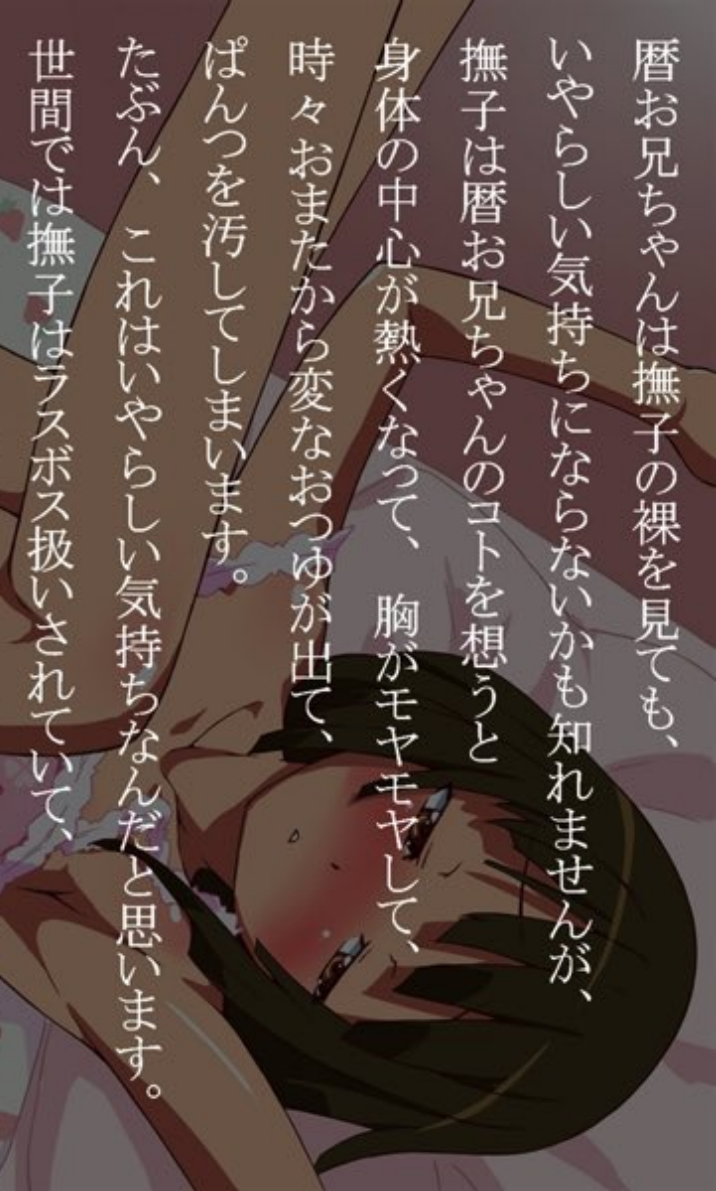
「戦場ヶ原先輩に許可をもらったと言ったな、

アレは嘘だ。」

次に戦場ヶ原に会った時に、

僕は無事でいられるのだろうか…。





暦お兄ちゃんは撫子の裸を見ても、
いやらしい気持ちにならないかも知れませんが、
撫子は暦お兄ちゃんのコトを想うと
身体の中心が熱くなつて、胸がモヤモヤして、
時々おまたから変なおつゆが出て、
ぱんつを汚してしまいます。

たぶん、これはいやらしい気持ちなんだと思います。
世間では撫子はラスボス扱いされていて、
永遠の片想いのためだけに暦お兄ちゃんを好きでいる
みたいに思われているかも知れませんが、
それは全くの誤解です。

「私」が思うところ、
今の撫子は同人の中の撫子なので、
原作とは一切関係がないのです。

「そういうメタはよすんだ!」と、
暦お兄ちゃんの声が聞こえた気がしますが、
きつと気のせいです。



漫画家を目指す撫子は同人にも精通してるのです。
えっへん。

だから撫子は今でも暦お兄ちゃんが大好きです。

思い込みだけで神様を作り、

遂には神様にまでなつてしまった撫子ですが、

最近はその思い込みで

目の前に暦お兄ちゃんを作ります。

今日も目の前の暦お兄ちゃんは

撫子の胸のモヤモヤを消すために、

優しく抱きしめてくれます。



ん、曆お兄ちゃんの手…

こんな感じ、かな？

ん、んふ、んんっ

ふっふっふ

ふっふっふ

あつ、 曆お兄ちゃんダメだよお、
そんなトロ触っちゃ、

また変なおつゆが出てきちやう

「あつ、 あつ、 ああつ……」



あ…おぼんつ…

撫子の、大事なトコロ

直接触ったり、舐めちやれたり

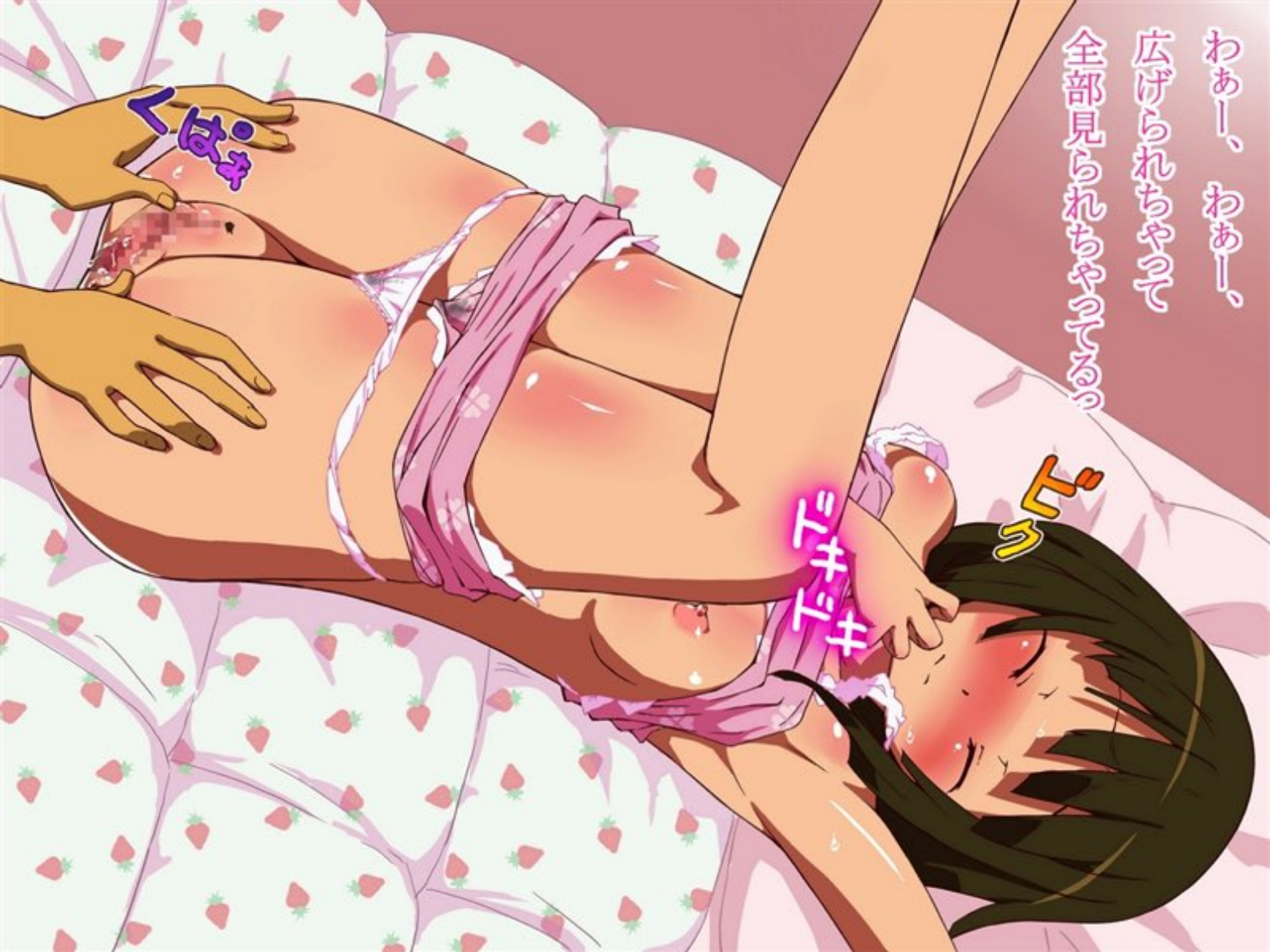
しちやうのかな？

ニキニキ

んん

ん





わあー、わあー、
広げられちゃって
全部見られちゃってるっ

くはき

キキキ

ドドド

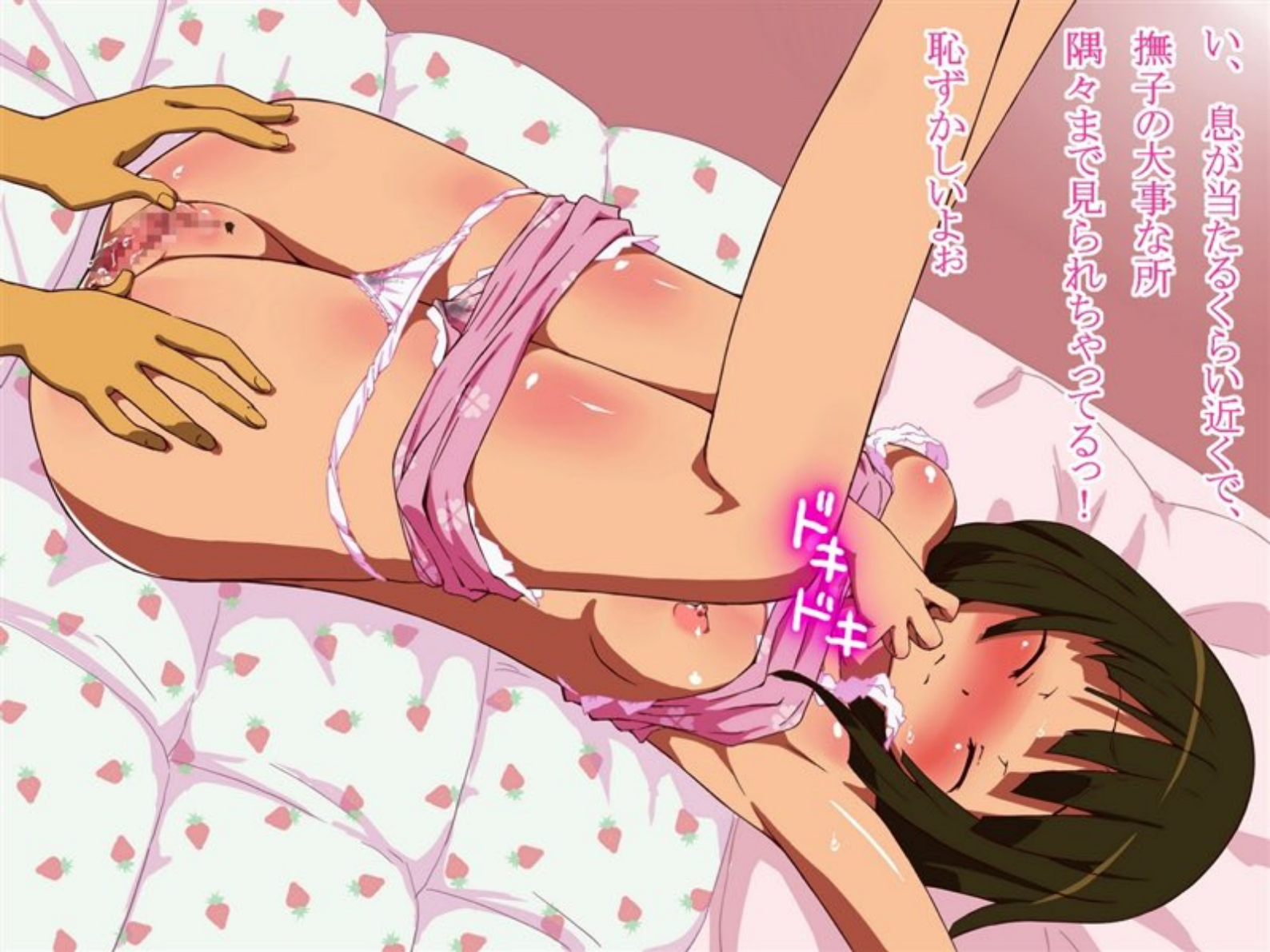
い、息が当たるくらい近くで、

撫子の大事な所

隅々まで見られちゃってるっ！

恥ずかしいよお

キキキ



「んっ、んっ、んっ、んっ、んっ」

舐められちゃってっ

すいすいやらしげ音...

気持ち良い...



「んっ っんっん っんっん」

アッコがジーンズンしてきた...

すごく切ないよお



「あああああ！」

ソコはダメだよ、曆お兄ちゃんっ
まだ皮被ってるけど、

すごく敏感なの。

そんな所、舐められちゃったら

撫子、すぐイっちゃうよお！





「あっ、 あっ、 あああああああっ!!!」

イっちゃやう、

もうイっちゃやう!!!

「えっ!？」

か、皮…剥けちゃった

嘘!?剥けたばかりの

お豆さん直接舐めちゃ…

ド
ウ

くら





イクぅーっ!!!

「んんん〜〜〜!!!」

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴク

ゴク

剥けたてのお豆さん舐められて
イっちゃった…。



あれ？あれれ？

暦お兄ちゃんのおちん○んが
撫子のアソコに当たってるよ？

今いったばかりなのに

もう挿入れちゃうの？

はぁ

はぁ

ピト...





「あああああつ!!!」

「あっ、 あっ、 ああっ、 あん
はあん、 んっ、 んんっ」

ダメだよ、 曆お兄ちゃん

撫子ずっとビクビク止まらないよお

イキっぱなしだよおっ!!!



「あああああああああああ!!!」

また、また

大きいの来るよおおーっ!!!





「……」

「しゅ、しゅ」だった...。」

暦お兄ちゃんは

こんなになっちゃうかな撫子のコトを

どう思うのかな...



はぁ
はぁ

しゅ...



後日談なんてありませんよ。オチもありません。
撫子は妄想でいつちやうすぐくえつちな女の子、
それだけです。

本当はその一行で終わってよかったような話なのです。
なんて言うのと、どこかの誰かさんは
「エロ同人なんだからそんな訳ないだろっ！」
と言いそうですが…。

…誰かつてだれのコトでしょう？
知りません。



直江津高校の体育倉庫で待っています。

そんなメールが携帯に届いた。

送信者の名前は「羽川翼」。

もう日は沈んでる。こんな時間に羽川から

呼び出しのメール？

あの時間に厳しい羽川がこんな時間に

僕を呼び出すだなんてただ事ではないはずだ。

学園祭前、ネコミミが生えた時のコトを思い出す。

僕は愛用のママチャリにまたがり、

急いで直江津高校の体育倉庫を目指した。

学校に着くと自転車を飛び降り、

すぐさま体育倉庫に向かった。


校庭にポツンとある体育倉庫を見ながらふと思う。

そういや春休みの間、ココには結構世話になったな。

ドラマツルギーとのバトルの時。

忍一キスショットから逃げ出して隠れてたのもココだっけ。

あの時は羽川に励まされたっけな。



…なんか色々惜しいこともした気がするけど、
きつと気のせいだ、うん。

羽川の胸を形が変形してしまうんじゃないかって
くらいに揉みしだしておけば良かったなあ、

なんてことはこれっぽっちも思っていない。微塵も。

そんなコトを考えながら体育倉庫の鉄扉をノックする。

こんこんと。

なんとなくあの時のコトを考えていたからか、

あの時の羽川と同じようなコトを言ってしまった。

「男の子のお届け物です」

「…どうぞ」

中に入ると窓から微かにさす

街灯の明かりに照らされた羽川が四つん這いになり、

尻をこちらに向けて待っていた。

「お前は神原か!？」

「え？神原さん？」

つい突っ込んでしまった。

「なんでそんな格好なんだよ？」

つか、こんな時間にどうしたんだ？何があつたんだよ」

「えっと……」

傷物語のラスト手前のところで私のおっぱいじゃなくて

肩を揉んだコトを死ぬ程後悔しているんじゃないかなあと

思つて、こうしてあの時と似た

シチュエーションで誘ってみました。」

「お前は八九寺か!？」

「え？真宵ちゃん？」

なんなんだ一体、最近僕の周りの女子は

どうかしちまつてる。

とうとう羽川までおかしくなった。

本当にただ事ではない。

「僕はある時のコトはこれっぽっちも後悔してない！」

「そっか……後悔してないんだ。」

「ん？」

なんだろう、羽川はとて残念そうだ。

「私は…」

私は後悔してる。あの時阿良々木くん
胸を揉んでもらえなかったコト。」

「はいいい!？」

続きは新学期って言ったよね？

だから、今ここであの時の続きしよ?」

「ちよ、ちよつと待て羽川。」

いきなりそんなコト言われても僕にも

心の準備ってものが!

大体、僕には戦場ヶ原がいるし」

「その辺のコトなら大丈夫だと思うよ?」

「?????」

「だってコレは同人のお話だから

戦場ヶ原さんも多めに見てくれると思う。

それにエロ同人ともなれば、

そうでもしないとお話にならないでしょう?」

「お前は戦場ヶ原か!？」



てか、お前も同人とか言うのかよ！

やっぱコレ同人なんだな！

そういう髪を切ってコンタクトにしたはずの羽川が

お下げにメガネになっている…。

本当に時系列が目茶苦茶だ。

「それに、神原さんと真宵ちゃんとも、

もうしたでしょ？」

くっ、なんでそれを…。

それもやっぱり同人だからなのか!?

何でもありだなあ同人！

「うん…まあ。お前は何でも知ってるな。」

「何でもは知らないわよ。」

羽川は少し照れ臭そうにはにかんで言った。

「阿良々木くんのことだけ」

同人万歳！



「やっぱり、胸はまた今度で

良いかな？」

「どうして？」

「いや、そんな格好されたら、

むしろ、お尻の方に興味が…。」

「まあ、いいでしょう。」



「じゃ、じゃあ、

揉ませていただきます。」

「どうぞ。」



「ん…」

「うわあ…すげえ、柔らかい…」

でも、それでいて程よい弾力が

ある。」

さっせん

さっせん



「ん…んよ、んん。」

今、阿良々木くんが、私の

お尻を触ってる…。

夢じゃないんだ。

さっせん

さっせん



「肩揉んだ時も思ったんだけど
お前は全身おっぱいだな。」

「それは、褒め言葉…」

「なのかな？」

「もちろん。」

さっせん
さっせん

さっせん
さっせん



「(ゴクリ...)」

は、羽川…ココも触って良いか？」

「うん。」

「ズンズンすな。」

ピュッ

くはぁ

じわ...



はよ 『これが、羽川の…』

羽川って、

クリが少し大きめなんだな。」

『そ、そうなの?』

うわあ、
すごく恥ずかしい…。

ん



「うわあ、すげえ…」

羽川、すごくエッチだよコレ!

「えっ? ちよ、ちよっと」

な、何コレ!?

こんなの知らないっ!?

どく

くり



「ああああああああつ!!!」

も、ダメエ!!! イっちゃやう!!!

イクっ!!! イクうっ!!!

ゴ
ゴ

ゴ

ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ



はよ

はよ

はよ

いつちやった...

阿良々木くんにかさされちゃった...

ゴクゴク

んんん

トク

ゴクゴク



「え!? ちよ、阿良々木くん?

私、今その...

だから、少し休ませて!」

「ごめん、羽川...

お前可愛すぎるよ。

僕もう我慢できないよ。」

ビク

ビク

ビク

ピト...



ヤダ...

まだイクの終わってないっ
今、挿入されたら...

ドク

ドク





「あっ、あっ、ああっ、あんっ」

「うおおっ！羽川っ」

「すげえ、絡みつくっつ!!!」



「ああっ、ああっ、ふああっ

くう、ううんっ」

イクっ、またイクううっ！

…またあつ！

イクのが止まらないっ！



「あ、良々木くん、んっ、
お願い、も、や、めてえ、
私つきからイキっぱなし、なの」
「そ、そんな事言われたって、
もう、止まらないよっ！」

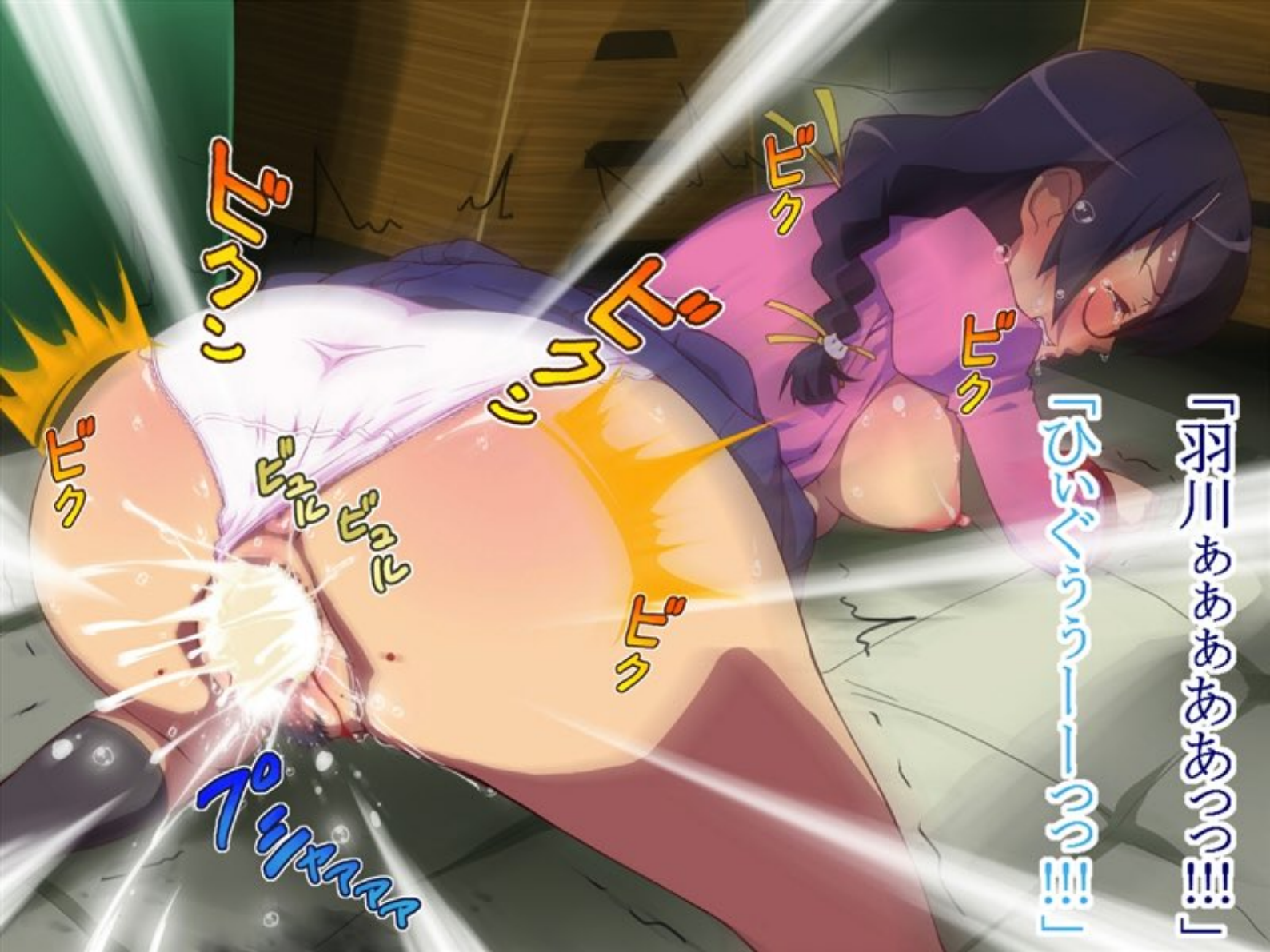


「ああああっ!!!羽川っ!!!」

もう、イクよっ!!!」

「あっ、あっ、わた、しも

またあっ!!!」



「羽川あああああつっ!!!」

「ひびく〜〜〜〜!!!」

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴク

ゴク

ゴク

ゴクゴク

ゴク

ゴクゴク



後日談というか、この物語のオチ。

直江津高校体育倉庫を後にして、僕と羽川は一緒に帰路についた。

「もう、あんなに沢山出して、

出来ちゃったらどうするつもりなのかな?」

どうせ、みんなにもすっかり膾内出ししたんでしょ?」

羽川は下腹部を軽く擦りながらそう言った。

「あ、いやあ、そんな時はコレ同人作品なわけだし、

“こよみハーレム” エンドってコトでおしまいなんじゃないかな?」

「ん??何??同人作品って?」

「...え?」

いや、だから、僕たちのこの世界は同人作品で、

本編とは一切関係ないから、時系列もバラバラだし、

僕が誰とエッチしたところで浮気にも何にもならない

って話だろ?」

「何その都合のいい世界、そんな訳ないじゃない。」

「はいい!？」

一瞬、僕の時間が凍りつく。

「今回の騒動は全部私が計画したコトなの。」

「…………えいと……。」

コイツハナニヲイツテイルンダ？

「私、阿良々木くんにフラれちゃったじゃない？

だから、初めてだけは阿良々木くんに貰ってもらって

それできつぱりおしまいにしようと思って、

今回みんなにそう言い聞かせて、事が上手く

運ぶようにしたんだ。」

「そ、それじゃあ……。」

「うん、メタ発言はいつもの事でしょ？

私の髪型は、ホラ。」

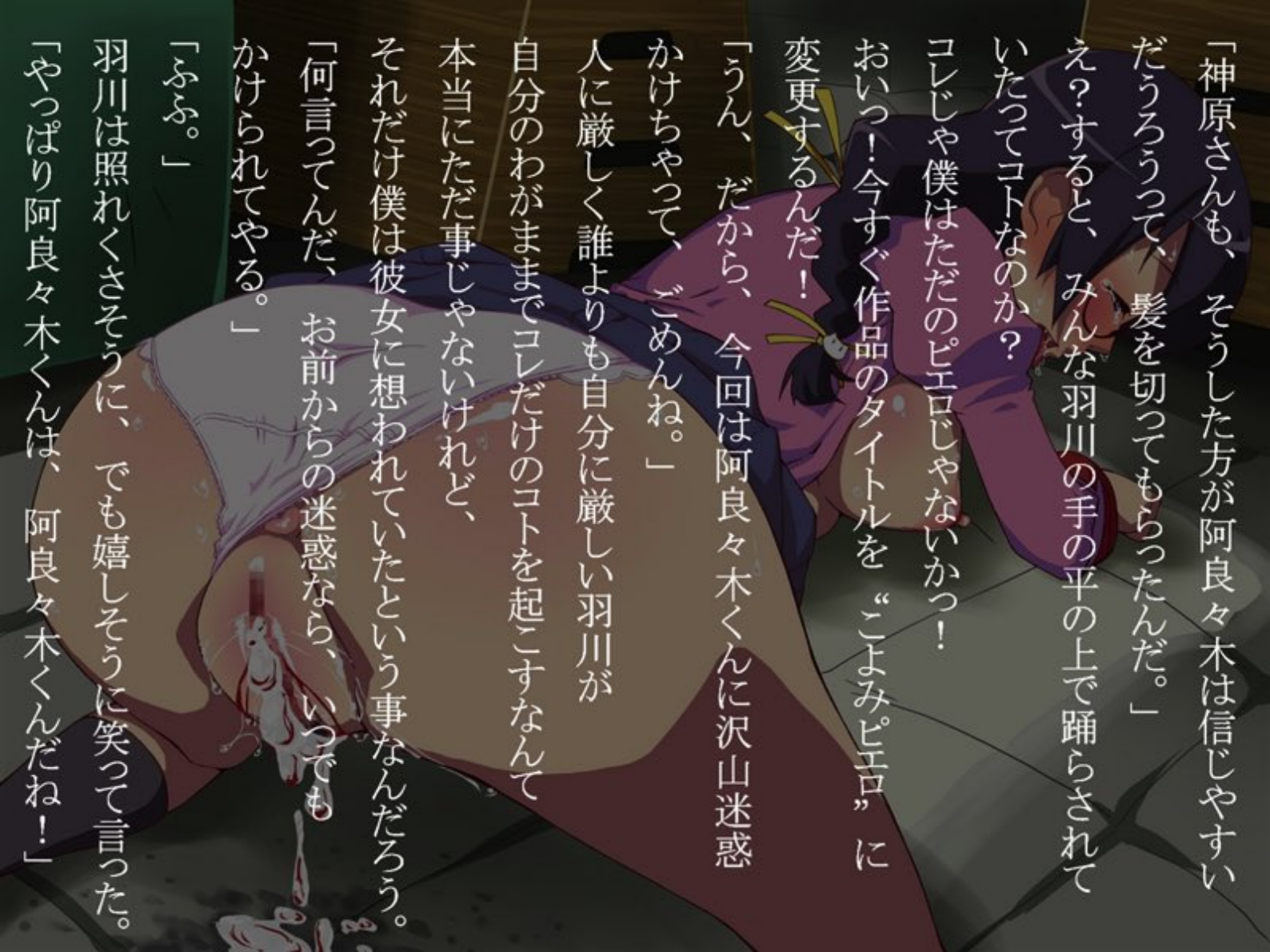
そう言って、羽川は前髪から仮面を剥ぐような

感じでガバッと髪の毛を引っ張った。

すると、その下から肩口までの前髪にシャギーが

入った、文化祭以降の羽川の髪型だ出てきた。

カツラだった……。



「神原さんも、そうした方が阿良々木は信じやすい
だろうって、髪を切ってもらったんだ。」

え？すると、みんな羽川の手の平の上で踊らされて
いたってコトなのか？

コレじゃ僕はただのピエロじゃないかっ！

おいっ！今すぐ作品のタイトルを“こよみピエロ”に
変更するんだ！

「うん、だから、今回は阿良々木くんに沢山迷惑
かけちゃって、ごめんね。」

人に厳しく誰よりも自分に厳しい羽川が

自分のわがままでコレだけのコトを起こすなんて
本当にただ事じゃないけれど、

それだけ僕は彼女に想われていたという事なんだろう。

「何言ってるんだ、お前からの迷惑なら、いつでも
かけられてやる。」

「ふふ。」

羽川は照れくさそうに、でも嬉しそうに笑って言った。

「やっぱり阿良々木くんは、阿良々木くんだね！」